

中学生の居場所感と理想の学級像に関する研究 ーその共通点と違いに着目してー

松 島 生 幸*・稲 葉 光*・織 田 杏 里*・涌 井 健太郎**・稲 垣 応 顕***
(令和元年9月2日受付；令和元年12月17日受理)

要 旨

本研究では中学生がイメージする“居場所”と理想の学級像に着目し、学級に居場所感を与えるための要素を明らかにすることを目的とする。公立中学校、私立中学校に在籍する中学生405人を対象に質問紙調査を行った。居場所のイメージと理想の学級を自由記述で回答を求め、KJ法に依拠しグループ分けを行った。結果、居場所について中学一年生は、男女共に自分の存在を確認できる場所として捉えている傾向にあることが窺えた。また、その中で心理的側面を重視していることが示唆された。中学二年生の男子は外交的であり、人とのつながりを求めるが、その為に発生する学級内の問題に直面していることが示唆された。また女子は自己防衛的な関係性をつくろうとするからこそ表面的な関係性になりやすく、心理的距離が遠く同調性の強いグループを形成してしまうことが示唆された。中学三年生の男子は、学級の雰囲気や周りの目や態度に敏感な部分が窺われた。また女子はいじめや仲間外れといった学級課題を恐れ、友人関係が希薄化される傾向にあることが示唆された。全体を通して、一般的に中学生男子の特徴として外交的で動的であると言われるが、本研究における記述内容からは心理的で静的な要素が多数窺われた。また、女子に関しては友人関係が複雑化されており、自分を受け入れてくれる“親友”の存在を求めていることが示された。加えて一般に女子は精神的には男子より成長が早いと言われるが、精神的には大人な分心理的には追いつかず、心理的ケアに十分配慮しなければならないことが示唆された。

KEY WORDS

居場所のイメージ feeling of “IBASHO” 理想の学級 Ideal Classroom
心理的距離 psychologically distant 友人関係 friendships

1. はじめに

学級経営は、担任教師が最も配慮する職責の一つである(蘭・高橋, 2009)。担任教師の学級経営の力量によっては、学級内の人間関係は非常に濃いものとなるが、生徒同士の人間関係の良し悪しが学級への適応の問題、学級の雰囲気や学習の理解度に大きな影響を及ぼす(蘭, 2016)。

学級経営を重要視する今日の学校において、学級課題はなくなることを知らない。不登校を例にとると、平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」(文部科学省, 2018)の結果より、校種別では中学校の不登校生徒の割合が特に高く、平成28年度の中学校不登校生徒の割合は全体の3.01%で33人に1人が不登校生徒であるという結果も出ている。これは、学級に約1人以上が不登校であるという計算になる。中学生という時期はアイデンティティを形成するうえで重要な時期であることも踏まえると、当該の問題は大きな問題であるとも言える。他方、今日ではグローバル化に伴い学級に在籍する外国籍の生徒の存在や宗教的な違いから発せられる差別問題や特別支援教育の視点からインクルーシブ教育の見直しなど社会的背景に伴った新たな学級課題も出現している。筆者らはこれらの学級課題は1992年、文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否(不登校)問題についてー児童生徒の「心の居場所」づくりを目指してー」という報告で述べている『心の居場所』が解決の糸口になるのではないかと考えている。

櫻井(2011)は、学校への登校理由の因子を「自己基準」「学校魅力」「外的圧力」からなることを明らかにし、中学生にとっての学校は、特定の意義や機能を持つのではなく、一つの社会として捉えていると考察している。つまり中学生にとっての「学校」は登校理由や学校の機能よりもそこでどのような人間関係が持たれているか、そしてどんな気持ちでそこに居るかという事のほうが重要なのではないかと(櫻井, 2011)と考えることができ、学校の捉え方も変化してきていると言える。この指摘を踏まえると、教師は自分たちが育ってきた教育環境とは異なった教育環境が生

徒たちを取り巻いていることを理解し、生徒の求める学級像を再度確認する必要があると考える。

そこで、本研究では中学生がイメージする“居場所”と理想の学級像に着目し、学級に居場所感を与えるための要素を明らかにすることを目的とする。

2. 居場所の定義

居場所の研究で最も議論されているのが居場所の定義である。杉本・庄司(2006a)は居場所を「いつも生活している中で、特にいたいと感じる場所」としている。また田中・田嶋(2004)は「安心できる」「落ち着いていられる」の二つの側面から居場所を捉えている。さらに、石本(2010)は「ありのままにいられる」と「役に立っていると思える」の二つの側面から居場所を捉えている。これらの定義について中島・廣出・小長井(2007)は、「自分自身」「アイデンティティ」「自分の存在」「自己の存在」「自分の位置」など「確認」「実感」「享受」「納得」できる場所であり、藤竹(2000)の「自分の存在を確認できる場所」に集約できるものであると述べている。本研究において筆者らは、藤竹(2000)の定義に依拠して論を進めていく。

何故ならば、杉本(2009)は、居場所の定義は①自己存在感に関するもの②精神的な安心や安定に関するもの③他者から認められることや受容に関するものの3つから構成され、「居場所とは場所のもとと持つ環境要因に、個人がどのように感じるかという感情要因が組み合わさることから、構成されている」と述べているが、これらの要素も前述の藤竹(2000)による定義であれば含まれる。同文献で杉本は「自分ひとりの居場所」が居場所として認知されることから、居場所とは人と関わる所という前提は、確かなものではないと述べている。これを住田(2003)の居場所の分類で当てはめると、個人的居場所(他者との関わりから離れて自分を取り戻せる場所)に当てはまる。このことは、学級としての居場所で考える際に社会的居場所(他者との関わりを持つことで自分を確認できる場所)に分類されるため、人と関わる所という前提を含んでいることを考慮しなければならない。しかし藤竹(2000)の定義であれば人と関わることで自分の存在を確認できるからである。したがって本研究では居場所の定義を「自分の存在を確認できる場所」とする。そのうえで本研究では学級が自分の存在を確認できる場所であるかどうか、つまり居場所感に着目していく。

先に述べたように居場所の捉え方は研究者により様々で、物理的な場所によってもそのイメージは異なる。それは、おそらくは中学生にとってもそうであろう。そこで本研究では生徒に居場所のイメージを聞くことにより、生徒一人一人が思う居場所とは何かについて明らかにする。筆者らは居場所イメージを収束させると「自分の存在を確認できる場所」になると予想しているが、個人が思う居場所のイメージは学級に居場所感を与えるうえで重要な視点となることが考えられるため、居場所のイメージを調査することとする。

3. 理想とする学級像

教師は学級担任を任された時、おそらく各人が理想の学級像を持ち、生徒たちと日々の生活を送っていくのであろう。

蘭・高橋(2011)は「学級集団においては安心感の増大すなわち社会的複雑性の低減は、消極性や活動の不活発さにつながる。生徒が必要とする安心感は、自分たちの活動を保証してくれる安心感であり、教師の指導を受けながらも生き生きと楽しく活動できる学級状況のこと」と述べている。また、同文献で蘭・高橋は生徒個々人の自由な活動をおびやかすような他の生徒の勝手な行動を統制されるだけでなく、教師が効果的な指導で学級集団をリードしながら学級経営を行い、それによって生徒たちの活動性を向上させる状態を安心型学級と呼び、日本では従来、理想型学級としてこの安心型学級が求められていたと述べている。

また、このような学級に所属している生徒たちは、教師の指導や支援によって活動するだけでは物足りなくなり、自分たちの手で活動を創造しようとし、個人と個人との関係性が形成していくというオートポイエーティックな創発学級が出現していく(蘭・高橋, 2011)。蘭・高橋(2016)はこれからの子どもたちに求められるのは、新しい状況に柔軟に対応できる新しい知識をもち、新規な状況を切り開く、個性的で創造的なコミュニケーション能力の高い人材であるため、創発学級がこれからの理想の学級となってくると考えられると述べている。以上のように理想の学級像は生徒の実態や求められる人材によって異なり、教師の視点と生徒の視点で見る学級像も異なる。本研究では生徒の視点で見た理想の学級像を調査し、居場所のイメージとの比較を行うことで生徒に居場所感を与える学級について考察していく。

4. 研究の方法

4. 1 調査対象

公立中学校2校(計10学級)、私立中学校1校(計4学級)に在籍する中学生405人(1年生145人、2年生141人、3年生119人)。

4. 2 調査時期と調査方法

本研究で使用する質問紙は2019年2月に筆者及び教育臨床を研究領域とする研究者1名と、同領域に所属する大学院生9名で作成した。

調査時期は2019年3月であった。調査実施に協力を得られた中学校の教員に質問紙実施方法を説明し、生徒への調査の説明・配布・回収を依頼し、質問紙調査を行った。なお、回答は無記名とする。質問紙では以下の項目について尋ねた。

- (1) 学年及び性別
- (2) 生徒が考える“居場所”という言葉のイメージ
- (3) 生徒は、学級がどんな場所だったら良いと思うか

4. 3 分析方法

本研究では質問紙調査で得た記述データをKJ法(川喜田二郎, 1985)の手順を参考に処理を行った。

- (1) 学年ごとに記述データを集計する。
- (2) 各学年の性別ごとに記述データを小グループにまとめる。
- (3) 小グループをまとめ大グループを作成し、一行見出しを付ける。
- (4) 図解化する。
- (5) 文章化する。

以上の処理を始めに「(2) 生徒が考える“居場所”という言葉のイメージ」毎に整理を行った。その後、整理された大グループごとに「(3) 生徒は、学級がどんな場所だったら良いと思うか」に対する回答単位で再び同じ処理を行った。それにより、生徒各人のもつ居場所のイメージと理想の学級の比較を行い、学級に居場所感を与えるための要素を明らかにした。

5. 結果と考察

5. 1 中学生の居場所のイメージ

以下はKJ法の手順(3)までの居場所のイメージを整理し、男女別に比較した結果を示す。その際、質問項目が無回答であるものおよび質問項目(3)で“わからない”との回答を除いた中学一年生99名、中学二年生91名、中学三年生82名の回答を使用した。質問項目(3)が無記入あるいは“わからない”と回答している割合は、女子生徒よりも男子生徒の方が多かった。石本(2010)は居場所という言葉は、不登校の子どもが持つ、言い表しがたい苦しい状態を“居場所がない”といった言葉で表したものであると述べている。つまり苦しい状態にある時自分の居場所について考える。この結果は男子生徒よりも女子生徒の方が居場所の有無について考える傾向にあることを示すものとも考えられる。

5. 1. 1 中学一年生の居場所のイメージ

表1は中学一年生の居場所のイメージをグループ分けしたものである。その結果、中学一年生の男子は居場所を『安心して楽しめる場所』『家をはじめとした場所』『自分を活かして成長できる場所』『受け身の場所』『仲間がいる場所』の五つのイメージをしていることが示唆された(表1; n=43)。また、中学一年生の女子は居場所を『居心地の良い場所』『具体的な場所と今自分がいる場所』『自己を認識する場所』『存在感の得られる場所』『親しい人がいる場所』の五つのイメージをしていることが示唆された(表1; n=56)。その結果、男女共に「家や学校など」「自分の家・学校・外」といった具体的な場所を示す記述や、「自分がいる場所」というような今現時点で自分がいる場所を居場所としてイメージしている生徒が多い。男女の違いとして男子生徒は「自分が安心していれる場所」や「そこにも嫌な感じがしない場所」といった心理的側面と「仲間といること」というような外交的な側面の両方が見られた。それに対し、女子生徒は「信頼できる人と一緒にいる場所」「居心地が良いところ」というような心理的背景や

心理的側面が感じられる記述内容が多く認められた。また、男子生徒の記述には“仲間”という表現から家族や教師よりも友人を連想させる。したがって、男子生徒は友人関係と居場所のイメージを連想させていると考える。それに対して女子生徒は、“家族”といった記述が見られことから友人を含めた親しい人が存在する場所を居場所のイメージとして持っていることが推察される。

表 1 中学一年生の居場所のイメージ

男 (n=43)		女 (n=56)	
居場所のイメージ	例文	居場所のイメージ	例文
安心して楽しめる場所 (n=9)	・ 居て楽しいと思える場所 ・ 自分が安心していられる場所	居心地の良い場所 (n=21)	・ 自分がリラックスできる場所 ・ 居心地が良いところ
家をはじめとした場所 (n=18)	・ 家や学校など ・ 家族がいる家、仲間、友達がいる学校	具体的な場所と今自分がいる場所 (n=11)	・ 自分の家・学校・外 ・ 自分がいる場所
自分を活かして成長できる場所 (n=6)	・ 自分が成長できる場所 ・ その人が素で過ごせる所	自己を認識する場所 (n=9)	・ 自分が存在するための必要な場所 ・ 自分が居るべき場所
受け身の場所 (n=3)	・ 自分がいてもいいような所 ・ そこにいても嫌な感じがしない場所	存在感の得られる場所 (n=8)	・ 自分がいてもいいと思ったこと ・ 自分が必要とされている場所
仲間がいる場所 (n=3)	・ 仲間といること ・ 自分が楽しめる仲間がいるところ	親しい人がいる場所 (n=4)	・ 家族や友達とふれあって生活する場所 ・ 信頼できる人と一緒にいる場所
その他 (n=4)	・ 自分のよくいる場所や落ち着く場所	その他 (n=3)	・ 居心地の良い、安心する場所

5. 1. 2 中学二年生の居場所のイメージ

表 2 中学二年生の居場所のイメージ

男 (n=34)		女 (n=57)	
居場所のイメージ	例文	居場所のイメージ	例文
動的感情を与えてくれる場所 (n=17)	・ 自分が安全に楽しく過ごせる場所 ・ 自分が楽しくいられる場所	安定的な感情を与えてくれる場所 (n=32)	・ 自分の心が落ち着く場所 ・ 自分が安心していられる場所
自分が承認される場所 (n=4)	・ 自分が必要とされている場所 ・ 自分が良い意味で必要とされていること	肯定できる場所 (n=5)	・ 自分の存在できる所 ・ 自分を必要とされている場所
学校を含めた物理的な場所 (n=4)	・ 自分のクラス ・ 家・学校	物理的な場所 (n=5)	・ 自分の家 ・ スペース
みんなにとっていい状態の場所 (n=2)	・ みんなが笑顔で話し合える場所 ・ 私の個性と他人の個性が釣り合う場所	自分にとっていい状態の場所 (n=7)	・ 楽でいられる場所 ・ みんなが仲良く、いじめ1つない輪
他者の存在する場所 (n=2)	・ その人がいなければ成り立たない場所 ・ 自分の友達という所	情緒的につながれる場所 (n=4)	・ 友達、教師に恵まれること ・ 互いを思い合えるような相手がいる時
その他 (n=5)	・ その場において心を痛めず、楽しめる所	その他 (n=4)	・ 笑顔でいられる所で、疲れない所

表 2 は中学二年生の居場所のイメージを整理したものである。結果、中学二年生の男子は居場所を『動的感情を与えてくれる場所』『自分が承認される場所』『学校を含めた物理的な場所』『みんなにとっていい状態の場所』『他者の存在する場所』の五つのイメージをしていることが推察された(表 2 ; n=34)。また、中学一年生の女子は居場所を『安定的な感情を与えてくれる場所』『肯定できる場所』『物理的な場所』『自分にとっていい状態の場所』『情緒的につながれる場所』の五つのイメージをしていると思われた(表 2 ; n=57)。その結果、男子は『学校を含めた物理的な場所』として「自分のクラス」「家・学校」というように学校を含めた記述内容しているのに対し、女子は『物理的な場所』として「自分の家」「家」といった学校を含まないイメージをしていると考えられた。このことは、男子の「その人がいなければ成り立たない場所」「自分の友達という所」の記述からなる『他者の存在する場所』といった人間関係を居場所として連想していることにつながると推察する。そして、男子の多くは友人の居場所に居場所をイメージしており、友人と過ごすことで個人の居場所感を得るのだと考える。それに対し女子は「友達、教師に恵まれること」「自分を理解してくれる人や環境があるところ」などの記述から『情緒的につながれる場所』として、前述で示した『具体的な場所』にはなかった学校を表すような記述が見られた。このことから女子は友人との関わりに限定するのではなく、自分を心理的に支えてくれる存在を必要としていると考えられる。その中で「家」は家族以外の他者とのつながりがなく心理的に休める場として表しているのではないと思われる。そして、男女のこれらの特徴は男子の「自分が安全に楽しく過ごせる場所」「みんながいて自分が楽しめる場所」などの記述からなる『動的感情を与えてくれる場所』と女子の「安心して学校生活ができる場所」「自分の心が落ち着く場所」などの記述からなる『安定的な感情を与えてくれる場所』の記述からも読み取ることができる。男子は「楽しさ」を連想させる記述が多く、筆者は友人との関わりのことを示すものであると考えることから、友人とのつながりに居場所のイ

メージをしていると思われる。また女子は「安心」「居心地」といった記述が多く、筆者は人々のつながりやその場所に心理的な休養を連想していることを示しているものと考えことから、心理的な休養として居場所をイメージしていると推察される。

5. 1. 3 中学三年生の居場所のイメージ

表3は中学三年生の居場所のイメージをグループ分けしたものである。その結果、中学三年生の男子は居場所を『自分の存在を受け入れられている場所』『心が落ち着く場所』『今居る場所』『安心してみんなで楽しめる場所』『人が集まる場所』の五つのイメージをしていることが示唆された(表3；n=34)。また、中学三年生の女子は居場所を『自分の存在を証明できる場所』『心のよりどころとなる場所』『帰属意識が持てる場所』『安心して自分が楽しめる場所』『自分の周りに人がいる場所』の五つのイメージをしていることが示唆された(表3；n=48)。その結果、男子生徒は「自分が必要とされている場所」「自分の価値が認められる場所」というように周囲の人から自分が認められていると感じることで居場所を連想させることが推察される。女子生徒も「自分の存在を認めてもらえる場所」というように周囲からの受け入れを居場所と連想しているが「自分の存在を証明できる場所」というように自己をさらけ出すことで自らの力で自分を認めてもらおうとする記述内容が見て取れる。

また、記述例は少ないが男子生徒は「自分や周りの人が楽しいと思える場所」というように自分だけでなく周囲の人も気持ちが良いと感じられたときに居場所としてイメージするのに対し、女子生徒は「周りの人がつくるもの」や“自分が”から始まる記述内容が多く認められる。このことから自分を中心とし、個人の感じ方によって居場所をイメージしていることが示唆された。

最後に学年間を通じてみると学年が上がるにつれて居場所のイメージは心理的側面に集約されていると考える。これははじめや不登校、差別問題やスクールカーストといった学級課題が自然と居場所のイメージと連想しているからだと推察する。本研究で居場所のイメージを聞く際に場所を限定してはいないが、学級における自分の居場所として一度は考えたことのある生徒がいるのではないかと推察される。つまりそれだけ学級における生徒の安心や安全が守られてないことを意味し、今後検討していかなければならない問題の一つであると思われる。

表3 中学三年生の居場所のイメージ

男 (n=34)		女 (n=48)	
居場所のイメージ	例文	居場所のイメージ	例文
自分の存在を受け入れられている場所 (n=9)	・自分が必要とされている場所 ・自分の価値が認められる場所	自分の存在を証明できる場所 (n=17)	・自分の存在を証明できる場所 ・自分の存在が認めてもらえる場所
心が落ち着く場所 (n=7)	・その人が心地よく過ごせる場所のこと ・自分にとって居心地の良い場所	心のよりどころとなる場所 (n=14)	・心のよりどころ ・心が安らぐ場所
今居る場所 (n=4)	・いる場所 ・いるところ	帰属意識が持てる場所 (n=5)	・自分が所属している場所 ・友達の輪の中
安心してみんなで楽しめる場所 (n=3)	・安心して過ごせる場所 ・自分や周りの人が楽しいと思える場所	安心して自分が楽しめる場所 (n=6)	・自分が安心して過ごせる場所 ・自分が一番楽しく過ごせる場所
人が集まる場所 (n=4)	・クラス全員が集まる教室 ・クラス 部活	自分の周りに人がいる場所 (n=4)	・家族と一緒にいること ・周りの人がつくるもの
その他 (n=7)	・自分が落ち着いて楽しく過ごせる場所	その他 (n=2)	・自分のいる場所、自分がいれる場所

5. 2 居場所のイメージと理想の学級像

次に居場所のイメージの大グループごとに理想の学級を分類した。本研究ではその中でズレや特徴が見られるものに焦点を当て、考察していく。

5. 2. 1 中学一年生の居場所のイメージと理想の学級

表4は中学一年生が考える理想の学級を居場所のイメージごとに整理したものである。その結果、中学一年生の居場所のイメージと理想の学級を比較してみると、多くの生徒の理想の学級は居場所のイメージと類似していることが示唆される。その中で、男子生徒で居場所を『安心して楽しめる場所』とイメージしている生徒の中に「学級目標が達成できる学級」の記述から『学級目標が達成できる学級』や「ダメな事はダメと言える学級」などの記述から『相手のことを考える学級』を理想としている。これについて筆者は安心や楽しいと思えるための条件を表しているのではないかと考えている。岸田(1991)は、学級目標は学級の子ども全員の共同のゴールとして、象徴化された集団目標であると述べ、田代(2000)は、目的の共有は、不安定さの残る子どもたちにも統一感を与え、各々の役割を生かしあう経験を促し、学級の中に自らを位置づけるという個と全体との普遍的関係をおしえたと述べている。学級目標を定

表 4 中学一年生の居場所のイメージと理想の学級

男		女	
居場所のイメージ	理想の学級	居場所のイメージ	理想の学級
安心して楽しめる場所	楽しい学級 相手のことを思える学級 みんなが仲が良い学級 学級目標が達成できる学級	居心地の良い場所	雰囲気の良い学級 優しさと思いやりのある学級 学級課題がない学級 みんなが仲の良い学級
家をはじめとした場所	仲が良い学級 楽しい学級 学級課題のない学級 存在感がある学級 思いやりのある学級	具体的な場所と今自分がいる場所	仲が良い学級 楽しい学級 仲間外れのない学級 言われたことができる学級 思いやりのある学級
自分を活かして成長できる場所	普通の学級 元気で面白い学級 自分を活かせる学級	自己を認識する場所場所	個性を活かし認め合う学級 全員仲が良い学級 平等の学級 思いやりのある学級
受け身の場所	一人でいさせない環境が整っている学級 楽しい学級	存在感の得られる場所	全体で仲が良い学級 信頼できる友がいる学級 楽しい学級 メリハリがある学級
仲間がいる場所	メリハリのある学級 仲が良い学級	親しい人がいる場所	学級全体が仲が良い学級 学級にいたいと思える学級

めることで学級としてのまとまりを促し、学級内の存在意義を定める。これは、学級内に自分が居ても良いという安心感につながるものであると考える。また、相手のことを思える環境が整っていることも安心感を与える一つと考えることができる。安心できなければ楽しむこともできない。安心感を与えることは学級づくりの基礎であることが示唆される。

また居場所を『家をはじめとした場所』をイメージしている生徒に注目してみると、理想の学級として「いじめなどがなく、安心して仲良く生活できる学級」「授業がきちんと聞ける学級」といったいじめや学級崩壊などの学級課題を示すような記述内容が多く含まれていた。居場所を家から連想させる男子生徒は、その場所で感じられる雰囲気を敏感に感じ取り、学級に不安の要素や居心地の悪さを感じていると考える。また理想的学級の記述内容を見ると“みんな”や“全員”から始まる記述が多く周りを意識している傾向も窺われる。このことを踏まえると男子生徒は周りの目や態度から自分の置かれている状況やその場の雰囲気を敏感に感じ取る傾向があるのではないかと考える。友人関係を大切にしようとする男子生徒は、居心地の悪い場所にはいかなくとも、それ以外の場所では交流する。それが居場所のイメージで記述されていた「仲間との交流の場のこと」が示すものであると考える。学校に行きたいと思える学級にするには友人関係だけでなく、学級における雰囲気をよくする動きをして行かなければならないと推察される。

女子生徒においては居場所のイメージと理想の学級が共通したイメージとして捉えられるものが多い。したがって、前述までの結果から理想の学級とは、学級に自分の居場所があると感じられる学級であると考えられる。その中で『存在感の得られる場所』と居場所をイメージしている生徒の中に「グループができなくて、みんなが仲良しな学級」という記述が見られた。これは理想の学級では『全体で仲が良い学級』として分類している。また、『居心地が良い場所』として居場所をイメージしている生徒の中にも「グループが無く、みんなが仲の良い学級」という記述が認められる。これは『学級課題がない学級』に分類した。筆者は女子の記述にしか見られない“グループ”がないに着目している。筆者はこの背景に友人間のカーストや同調性による心理的負担が関係しているのではないかと考えている。石本ら(2009)は「本来であれば友人関係が最も重要な対人関係となる青年期において、友人に対して距離をとりつつも同調的な態度をとるということは、ありのままの態度ではないということであり、過剰適応的な状態であるといえるであろう」と述べている。また同文献で友人との心理的距離と同調性によって学校適応にも影響があることが明らかにされている。学級内に同性のグループをつくりその中で学校生活を送ることは、中学生女子にとって一般的な傾向であるのかもしれない。しかし、その中で感じられる心理的な距離や同調性から女子生徒はグループ内での居場所に苦しめられていたとも考えられる。“グループ”がない学級とは今の学級内の現状を表し、生徒が感じている悩みの一つであるのかもしれない。

5. 2. 2 中学二年生の居場所のイメージと理想の学級

表5 中学二年生の居場所のイメージと理想の学級

男		女	
居場所のイメージ	理想の学級	居場所のイメージ	理想の学級
動的な感情を与えてくれる場所	明るい雰囲気のある学級 協調性がある学級 思いやりが持てる学級	安定的な感情を与えてくれる場所	学校課題がない学級 ありのままの自分でいられる学級 仲間意識のある学級 環境が整っている学級
自分が承認される場所	人のために何かができる学級 楽しい学級	肯定できる場所	環境がいい学級
学校を含めた物理的な場所	対人関係が良好な学級 集中できる学級	物理的な場所	自主的にルールを作っていける学級 理想的な人間関係にある学級
みんなにとっていい状態の場所	自分が目立たない学級	自分にとっていい状態の場所	満足感の得られる学級 仲の良い学級
他者の存在する場所	チームとしての学級	情緒的につながれる場所	他者が環境整備をする学級 苦手意識がない学級

表5は中学二年生が考える理想の学級を居場所のイメージごとに整理したものである。その結果、男子は居場所を『自分が承認される場所』とイメージしている生徒が理想としている『人のために何かができる学級』と居場所を『みんなにとっていい状態の場所』とイメージしている生徒が理想としている『自分が目立たない学級』が矛盾した理想像を持っていることが推察される。まず、『自分が承認される場所』とは、「自分が必要とされている場所」「自分が良い意味で必要とされていること」などの記述からなり、周りの人が自分を認めてくれる状態にあることを指す。居場所にこういったイメージをもつ生徒は「1人1人が学級のために動いている学級」「学級の仲間が悪いことをしたらちゃんと怒れる学級」などの記述のように自分だけでなく、周りの人に視野を向けることができることを理想としているようである。次に、『みんなにとっていい状態の場所』とは「みんなが笑顔で話し合える場所」「私の個性と他人の個性が釣り合う場所」などの記述から、その場にいる全員が不快感をもたない状態を指す。居場所にこういったイメージをもつ生徒は「いじめがなく、みんな仲が良い学級」「全ての人が平等に楽しく笑い合える学級」というようにいじめがなくすべての人が平等に楽しくいられる状態を理想としている。しかしこれは、いじめの対象にならないようにしたいという、生徒たちの表れではないかと考える。したがって他者との関わりが希薄化し、自分を守る環境を整えることを理想としているとも考えられる。つまり先に取り上げた『人のために何かができる学級』とは矛盾する。

このことから今日の男子は“いじめ”“仲間外れ”といった学級課題に恐れ、自分をあまりさらけ出すことをせず、学級の輪の中にあまり目立たない形で加わることを理想としているが、仲間意識を強く持っているため、身近にいじめられている人が居れば助けてあげたいという気持ちを備えているのだと推察する。教師は学級課題を無くすことはもちろんであるが、このような生徒たちが持っている力を引き出してあげるためのサポートも積極的にして挙げなくてはならないと考える。特にいじめ問題は加害者・被害者の他に傍観者が存在する。学級内の問題に入り込むことができず、ただ時が去るのを待って、見てみぬふりをする生徒は多いだろう。しかし、生徒の多くは人のために何かしてあげたいと思っている。そういった生徒のサポートをこれからしていくことも教師に求められているのではないかとと思われる。

他方、女子は「リラックスでき、自己中がない学級」「悪い笑いが無い学級」などの記述から『他者が環境整備をする学級』、「誰もが皆笑顔になれる学級」「生徒がそれぞれの考えを伝え合い、互いに理解する学級」などの記述から『環境がいい学級』、「男女関係なく楽しい学級」「誰でも話ができて、明るくて落ち着ける学級」などの記述から『環境が整っている学級』というように居場所のイメージは異なるが、自分を取り巻く学級内の環境が整っていることを理想としている生徒が多い。そしてこれらの記述内容を見ると「自己中がない」「悪い笑いが無い」といった周りの人が環境をつくっていると思わせる記述内容が多い。また、居場所を『自分にとっていい状態の場所』としている生徒が「誰に対しても思いやりをもてる学級」「みんなが気持ちいい学級」などの記述から『満足感の得られる学級』、居場所を『物理的な場所』としてイメージしている生徒が「ルールがなく、自主的にルールをつくっていく学級」などの記述から『自主的にルールを作っていける学級』を理想としていることも含めると、女子は全体的に周りがつくりだす教室環境に対し自分は居心地が良いのかを判断し、学級の良し悪しを決める傾向にあるとも考えられる。そしてそれが自分の満足感を得られる環境であれば自己の存在意識を高め、『自分にとっていい状態の場所』に分類した「自分が自分でいられる場所」として学級があり続けるものと推察する。しかし、自分の型にはまらず満

足感や存在感を得ることができないとき、個人のルールを自主的に作成し、自分の環境を整えようとするのだと推察する。その典型が女子グループであると考えられる。落合・佐藤(1996)は、中学生の友人関係の特徴として、自分と友達との間に心理的距離を置き、周りに合わせることで自分を見せずに守ろうとすると述べている。ルールづくりやグループ形成は自分を守るべき手段であり、そこには心理的距離が近い友人関係は少ないと考える。したがって、女子は自分自身が守られる環境を求めていることが推察される。

5. 2. 3 中学三年生の居場所のイメージと理想の学級

表6 中学三年生の居場所のイメージと理想の学級

男		女	
居場所のイメージ	理想の学級	居場所のイメージ	理想の学級
自分の存在を受け入れられている場所	凝集意識がある学級 互いに受容し合う学級	自分の存在を証明できる場所	友人関係が良好な学級 教室環境が整っている学級 一体感がある学級 成長できる学級
心が落ち着く場所	協調性のある学級 楽しい学級 互いに高め合う学級 みんなが仲の良い学級	心のよりどころとなる場所	生徒主体的な学級 安心が保たれた学級 ピア・サポートができる学級 雰囲気の良い学級
今居る場所	学級課題のない学級 楽しむ時は楽しい学級 今の学級	帰属意識が持てる場所	行きたいと思える学級 全員が友達である学級
安心してみんなで楽しめる場所	明るく過ごせる学級 安心して過ごせる学級	安心して自分が楽しめる場所	行きたいと思う学級 不快感のない学級
人が集まる場所	協力できる学級 表情が明るい学級	自分の周りに人がいる場所	対個人・グループ間の関係が良い 学級学級全体として関係が良い学級

表6は中学三年生が考える理想の学級を居場所のイメージごとに整理したものである。その結果男子生徒は「みんなが仲良く、助け合える学級」などの記述から『協力できる学級』、「みんな一人一人が一つのことに協力して取り組めるような学級」などの記述から『協調性のある学級』、「全員が一つになって頑張れる学級」などの記述から『凝集意識がある学級』というように居場所のイメージの仕方は異なるが、学級を集団として認識し、集団としてまとめ、互いに支え合うことができる学級を理想としていることがわかる。筆者は凝集意識や協調性は学級における居場所感を得るためには必要な要素であると考えられる。先に述べたように居場所の有無について考えるのは居場所がないと感じた時である。凝集意識や協調性は学級内の存在意識を高め、居場所がないと感じさせることがないようにするのはないかと考える。

また筆者は『人が集まる場所』の『協力ができる学級』に分類した「みんなが話しやすく、いじめがない学級」の記述に着目している。落合・佐藤(1996)は中学生男子の友達付き合いは女子に比べて浅く狭い傾向にあることを明らかにしている。このことから筆者は協調性が強いのは同調性が強い関係にある友人間ではないかと考えている。そしていじめを心配する記述から男子生徒間においても学級内で力を持つグループとそうでないグループによる上下関係は存在していると考えられる。しかし、男子の友人関係が女子と異なるのは、上位グループと下位グループが決して対立した関係ではないということである。これは個々の関係が浅いからこそ成り立つことでもあると思うが、男子は基本的に学級で盛り上がる時は普通のグループとは関係なく、学級内でまとまって盛り上がることはできるのではないかと考える。学級全体としての協調性や個々の持つ凝集意識とはこういった普通の生活で関わるのが少ないグループの友人と協力することを意味しているのものであるとも考えられる。

他方、女子生徒であるが、『自分の周りに人がいる』を居場所のイメージとしている生徒は「時々仲間割れもするけど、仲の良い学級」などの記述から『対個人・グループ間の関係が良い学級』、「気を使うことなく、自分をさらけ出せる学級」などの記述から『学級全体として関係が良い学級』の二つを理想としていることが推察される。これは、女子生徒がグループ内の自分の居場所と学級内の自分の居場所と言うミクロとマクロの視点により自分の立ち位置を認知しているのだと考える。また、『帰属意識が持てる場所』を居場所のイメージとしている生徒は「自分の気持ちをはっきり伝えられる学級」「クラス全員を友達と言える関係の学級」などを記していることから、『全員が友達である学級』、『安心して自分が楽しめる場所』を居場所のイメージとしていた。加えて、「人の強い弱いがない学級」「クラスみんなが笑い合って、嫌な思いをしない学級」などの記述から『不快感のない学級』を理想としていることから学級内の友人関係を意識していることが推察される。石本ら(2009)は希薄な友人関係は学校適応においても望ましくないということを明らかにしている。落合・佐藤(1996)は中学生女子の友達とのつきあい方は浅く広い傾向

にあることを明らかにしている。このことを踏まえ、理想の学級を見てみると女子生徒の理想の学級には理想の人間関係が含まれているのではないかと推察する。女子は心理的距離が近いと学校適応も高くなる(石本ら, 2009)。しかし、グループ内や学級での自分の立場を気にすることで友人関係が希薄化される。つまり、学級のグループの中に居場所があることで安心感を得られるが、そのグループの関係は心理的距離が遠い分心理的疲労感がたまるのだと考える。三浦・坂野(1996)は友人との関係がストレスターとなったときサポート希求つまり周りから支えられたいと願っていると述べている。したがって、女子生徒は学級内で心理的に距離が近い友人を求めているとも考えられる。

5. 3 全体的考察

本研究では生徒が考える“居場所”と理想の学級像に着目し、各学年の男女別に居場所のイメージと理想の学級を整理し、比較してきた。最後に居場所のイメージと理想の学級の比較した結果を考慮した居場所のイメージの図解化をし、そこから導き出されるものを以下に記述する。

中学一年生の男子は居場所のイメージを家から連想させる人が多く遮光的な傾向にあると推察する。そのため、その場に居て良いかを周りの目や態度を見ながら感じ取り、その場の雰囲気や心理的な安心が確保されているなどの心理的側面を重視する傾向にあると考える。しかし、一般的に男性は外交的で動的であると言われている。そのため、友人との交流が活発であり、仲間意識が高い傾向にあるとも考えられる。そういった傾向が周りとの競争心を生み、自分を活かして成長しようとする場所を求めているのだと考える。

また、女子は目の前の状況や身近な人の様子を窺う傾向にあることが示された。すなわち、具体的な場所や今自分がいる場所といった記述が多く認められた。そのような具体的な場所は自己を認識させる場所となる。これは自分を主張するための場所を求めていることの表れとも受け止められる。しかし、自己を主張しすぎてしまえば当然周りから省かれることもある。自己を主張したいが、その反面逃げ場をつくっておきたいのかもしれない。女子はもしかすると心理的にはあまり強くはないものと考えられる。また、居心地の良さもまたその一つかもしれない。しかし、居心地の良さを気にすることは周りからの目を気にしているという現れとも捉えられる。周囲からの目を気にしている生徒にとって信頼できる人がいることは大きなことで、例え一人であってもいるだけで、心理的に支えられる存在となる。そして自己の存在感が得られることもその一つかもしれない。この存在感は学級という単位だけでなく、グループ単位での存在感を表し、グループの中で省かれないことで存在意義を見いだしているのかもしれない。もしグループの中でもめ事があれば、当然一人になる。そんな時自分を支えてくれる友達が必要なのかもしれない。

以上より一年生の女子は居場所をなければならぬ物として捉え、男子もまた、自分を活かす場として捉えていることより、自分の存在を確認できる場所として捉えている傾向にあることが窺える。また、その中で男女共に心理的側面は強く、居場所感を与えるには心理的なアプローチが必要であることが考えられる。特に男子は学級づくりのはじめに与える安心感、女子は学級内で心理的距離が近い友人関係の形成をすることによる安心感を与えることが学級における居場所感を与えるために重要になってくる。

次に二年生の男子だが、『学校を含めた物理的な場所』としているように「自分のクラス」などの学校や学級をイメージしている生徒がいることより学校や学級に焦点を当てて見ると、学校や学級が“人”特に“友人”が集まる場所として捉えているからこそ『他者の存在する場所』や『動的感情を与えてくれる場所』として居場所をイメージするのだと考える。しかしその反面、人の集まる場所であるからこそ“いじめ”をはじめとする学級内の問題が発生する。それゆえに生徒は『みんなにとっていい状態の場所』を居場所としてイメージする。またこれは理想的な学級を見ても“いじめ”を恐れ、消極的に行動しようとする生徒が複数いたことから言える。したがって、生徒たちは『自分が承認される場所』を居場所とし、学級における自分の所属感のようなものを高めることで、自分を守ろうとしているのだと推察される。理想の学級から男子生徒は人のために何かしようという気持ちは持っているが、行動にできず結果的に傍観者になってしまう生徒が多いと考える。筆者は『自分が承認される場所』として学級を捉えさせてあげることが傍観者からの脱却の第一歩になると推察する。

また二年生の女子は『物理的な場所』として「自分の家」をイメージすることや『情緒的につながれる場所』をイメージしていることからこれらを含めた『安定的な感情を与えてくれる場所』をイメージしていることがわかる。そしてこれは『自分にとっていい状態の場所』や『肯定できる場所』とその場所を感じさせる。理想の学級から自分を守る環境を整えることをふまえると、「安心」や「居心地」といった安定的な感情を与える環境を整えることが求められる。

以上より二年生は男女共に友人関係にアプローチしていくことで居場所感を与えることができると考える。特に男子は外交的である分人とのつながりを求めるが、人とのつながりがあるからこそ発生する学級内の問題に直面している。したがって男子には自分を確認できる場所として学級を捉えてもらうために協調性をより強化する取り組みをし

ていくことが居場所感を与える上で効果的であると考え。また女子は自己防衛的な関係性をつくろうとするからこそ表面的な関係性になりやすく、心理的距離が遠く同調性の強いグループを形成してしまう。したがって女子には相手のことを深く知ろうとする活動を取り入れることで、心理的距離の近い集団をつくり、「安心」や「居心地」といった安定した感情を与えることが居場所感を与える上で効果的であると推察される。

次に三年生男子だが、今いる場所とは人が集まる場所やみんなで楽しめる場所を居場所としてイメージしていることから、今をみんなで楽しもうという考えからくるものだと推察する。これは男子の外交的な特徴や仲間意識からくるものであると考える。また、みんなで楽しもうとする傾向から、気を遣わなくてよい関係性を求めていることを推測させる。つまり、素の自分を相手が受け入れてくれていると感じることができる関係をつくろうとしていると考えることができる。素の自分を受け入れられれば、当然その場所は居心地も良く心が落ち着く場所と言えるだろう。したがって男子は今をみんなで楽しめる関係をつくることで、心理的にも落ち着ける環境を築こうとしていると推察される。

また三年生の女子は自分がその輪の中に入りこめているかどうかを気にする傾向にあると推測できる。そのため、帰属意識を高めるのは自分の周りに人がいるかどうかや、自分はその輪の中で楽しめているのかどうかといった意識であると考え。そして三年生の女子はその輪の中で自分の存在をアピールしようとする。他の人とは違う自分自身を出していくことで、自分の存在を証明しているのかもしれない。しかし、周りを気にして相手の様子を窺う毎日が続けば、心理的な負荷も多い。そのため心のよりどころとなる場所を求めているのかもしれない。そして、こういった連鎖が生まれる背景にはスクールカーストのような学級内の上下関係が関係していると考え。自分を下に見せないように自分をアピールし続け、常に気を張っているからこそ、心を休ませたいと思うのかもしれない。

以上より三年生は男女共に心を休ませる場として居場所をイメージしているがその背景は異なり、男女における心理的負担感も違うのではないかと推察する。したがって三年生には心理的に休め、楽に居られる場所としての居場所感を与えるためのアプローチが必要であると考え。特に男子は、学級の雰囲気や周りの目や態度に敏感な部分が見られる。そのため学級目標を明確にすることで凝集意識や協調性を高めることで、自分達の力で学級をよりよく変えていこうとするように働きかけることが有効であると考え。また女子はいじめや仲間外れといった学級課題を恐れ、友人関係が希薄化される傾向にある。そのため日ごろからのグループにでも属せるようなクラス環境をつくっていくことが居場所感を与えるために重要であると推察される。

全体を通じて一般的に男子の特徴として外交的で動的であると言われるが、本研究の記述内容からは心理的で静的な要素が多数見られた。今日の社会的背景や子どもの育ちの環境から男子の友人関係の構造も変化してきているのだと推察される。また、女子に関しては友人関係が複雑化しており、自分を受け入れてくれる“親友”の存在を求めていることがわかった。加えて一般に女子は精神的には男子より成長が早いと言われるが、精神的には大人な分心理的には追いつかず、心理的ケアに十分配慮していかなければならないことが示唆された。

6. 今後の課題

本研究において居場所のイメージと理想の学級像は近く、その関係性が示唆された。しかし、本当に関係性があるかどうかは明確ではない。また、本研究では具体的な場所を想像させて居場所のイメージを調査したものではない。そのため回答の中に家や今自分が居る場所といった回答が多く含まれてしまったが、なぜその場所が居場所としてイメージされるのかまでは明らかにすることができなかった。

今後は居場所のイメージと理想の学級についての関係性をより詳細に分析し、さらに居場所としてイメージされた場所がなぜその場所だったのかを明らかにすることで、学級における居場所感を与えるための要素をより詳細に見出すことが望まれる。

引用文献

- (1) 蘭千壽・高橋知己 (2009), 「自己組織化する学級づくり」をめざすハブスタンス型指導の提案, 千葉大学教育学部研究紀要, 第57巻, pp181-185
- (2) 蘭千壽・高橋知己 (2011), 自己創出を生むコミュニティとしての学級, 千葉大学教育学部研究紀要第59巻, pp183-190
- (3) 蘭千壽 (2016), 創発学級を導く学級経営の方法の開発, 千葉大学教育学部研究紀要, 第64巻, pp265-273
- (4) 藤竹暁 (2000), 居場所を考える／藤竹暁(編), 現代人の居場所至文堂, pp47-57

- (5)石本雄真 (2010), 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響, 発達心理学研究, 第21巻, 第3号, pp278-286
- (6)石本雄真 (2010), こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所, カウンセリング研究, 第43巻, 第1号, pp72-78
- (7)石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日湯淳子・森口竜平 (2009), 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連, 発達心理学研究, 第20巻, 第2号, pp125-133
- (8)川喜田二郎 (1985), 発想法をうながすKJ法／川喜田二郎(著), 発想法, 中央公論社, pp65-114
- (9)岸田元美 (1991), 学級話し合い活動／岸田元美(著), 学級話し合い活動, 明治図書出版株式会社, pp98-103
- (10)三浦正江・坂野雄二 (1996), 中学生における心理的ストレスの継時的変化, カウンセリング研究, 第44巻, pp368-378
- (11)文部科学省 (1992), 『登校拒否(不登校)問題について－児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して－』, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/001/001.htm, 2019.8.1
- (12)文部科学省 (2018), 学校不適応対策調査研究協力者会議報告(概要)『平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」』, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/10/1397646.htm, 2019.8.1
- (13)中島喜代子・廣出・小長井明美 (2007), 「居場所」概念の検討, 三重大学教育学部研究紀要, 第58巻, 社会科学, pp77-97
- (14)落合良行・佐藤有耕 (1996), 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化, カウンセリング研究, 第44巻, pp55-65
- (15)櫻井裕子, 中学生が考える「学校」と「不登校に対するイメージ」について, 奈良女子大学社会学論集, 第18巻, pp181-196
- (16)杉本希映 (2009), 児童期から青年期の「居場所」に関する先行研究／中学生の「居場所環境」における心理的機能に関する研究, 風間書房, pp5-40
- (17)杉本希映・庄司一子 (2006a), 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化, 教育心理学研究, 第54巻, 第3号, pp.289-299
- (18)住田正樹 (2003), 子どもたちの「居場所」と対人的世界／住田正樹・南博文(編), 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在, (財)九州大学出版会, pp3-20
- (19)田中麻貴・田畠誠一 (2004), 中学校における居場所に関する研究, 九州大学心理学研究, 第5巻, pp219-228
- (20)田代勢津子 (2000), 学級社会の秩序に対する教師の指導性, 日本教育方法学会紀要, 第26巻, pp21-29

A Study of “IBASHO” or Ideal Classroom Among Junior High School Students

Misaki MATSUSIMA* · Hikari INADA* · Anri ODA* · Kentaro WAKUI** ·
Masaaki INAGAKI***

ABSTRACT

The purpose of this study is to determine the elements which give a sense of whereabouts to the class for the feeling of “IBASHO” or Ideal Classroom by Junior High School Student. A questionnaire was administered to 405 public and private junior high school students. Students were asked open-ended questions about their feelings of “IBASHO” or Ideal Classroom. Answers were grouped with reference to the KJ method. The results show that first grade junior high school students tend to regard the classroom as a place where both boys and girls can confirm their existence, and that psychological aspects are strong. Second-year junior high school boys seek diplomatic connections while maintaining their distance, but are faced with problems in the class arising from their connections. Girls in this year tend to be superficial, as they seek to create self-defining relationships, and form psychologically distinct groups with strong synchronicity. Third year junior high school boys reported being struck by the class atmosphere and the sensitive parts of the surrounding eyes and attitude. Third year girls are afraid of class issues, such as bullying and losing friends, and their friendships tend to be diluted. Although it is generally said that boys are diplomatic and dynamic, many psychological and static elements emerged from the descriptions given in this study. The study also found that friendships between girls become more complex and that they seek “best friends” to accept them. In addition, it is generally acknowledged that psychological maturation for girls is faster than for boys. However, adults cannot keep up psychologically, and psychological care must be taken into account.

* School Education ** Private Sekine Gakuen High School *** Modern Education Task Research Course